

表8 実例Ⅰおよび実例Ⅱの採点表とそのI・Q算出

	I	II		I	II		I	II		I	II
1	+	+	11	-	+	21	-	+	31	-	+
2	+	+	12	-	+	22	-	-	32	-	+
3	+	+	13	+	+	23	-	-	33	-	-
4	+	+	14	-	+	24	-	-	34	-	+
5	+	+	15	-	+	25	-	+	35	-	-
6	+	+	16	-	+	26	-	+	36	-	+
7	+	+	17	-	+	27	-	-	37	-	+
	+	+	18	-	-	28	-	+	38	-	+
9	+	+	19	-	+	29	-	-	39	-	-
10	-	+	20	-	-	30	-	-	40	-	-
	9	10		1	8		0	4		0	8
										0	3

〔説明〕

実例Ⅰ、Ⅱでは、+（プラス）の計が、10と33でこれをI、Ⅱの総得点とする。

この総得点を表6により精神年齢に換算すると、それぞれ4歳10ヵ月と9歳7ヵ月になる。

これからI・Qを算出するには次のようにする。

○実例Ⅰ 総得点=10 生活年齢(CA)=4:6=12ヵ月×4+6 精神年齢(MA)=4:10=12ヵ月×4+10

$$I \cdot Q = \frac{MA (12 \times 4 + 10)}{CA (12 \times 4 + 6)} \times 100 = 107$$

○実例Ⅱ 総得点=33 生活年齢(CA)=10:6=12ヵ月×10+6 精神年齢(MA)=9:7=12ヵ月×9+7

$$I \cdot Q = \frac{MA (115)}{CA (128)} \times 100 = 89$$

(2) コピッツ法

この方法は、子どもの発達のな面、情緒的な面および脳損傷の有無を知ることができる。実施の方法は、グッドイナップ法と全く同じで、一枚の人物画が、この二つの方法に使用することができるすぐれた面を有している。コピッツ法では、コピッツの採点票を用いることが必要である。

① 採点票

期待項目とは、幼児・児童の発達段階からみて、人物画に出現が予想されるものであり、欠けている項目の1項目ごとにマイナス1点を与える。

期待項目の欠如は、診断的に意味があり、精神的未成熟を意味するようである。

異例項目とは、標準以上の精神的成熟を示しており、知能に関係がある。異例項目の出現は、プラス1点を与える。

なお、情緒指標の解釈は14ページにあるので参照されたい。

例1



氏名	K・Y	性別	男
年齢 学年	7歳3ヵ月 小 2	I・Q	WISC 64
主訴	知能のおくれ、言葉のおくれ		
H・F・D 所見	脳損傷と情緒障害をともなった児童の描画である。この情緒の混乱は、パーソナリティーまたは、神経系等の不安定から、攻撃的な行動を示していると思われる。		

② 採点方法

○表9発達項目一覧表により、期待項目をチェックする。上の人物画では、期待項目、異例項目ともチェックするところが少なく、姿の奇妙さが目立つように思う。

○H・F・D得点 上の例Ⅰ図の採点では
-1+0+5=4となり、知能水準は、平均下から平均ということになる。

○情緒の指標は、表10に基づいて行われる。